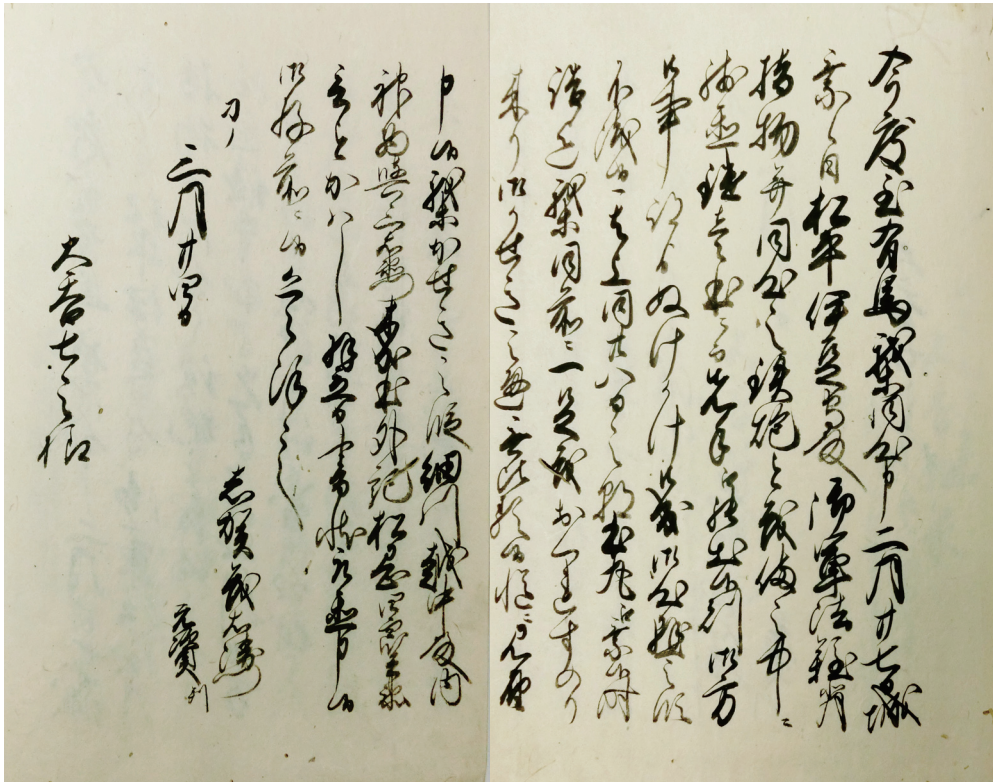
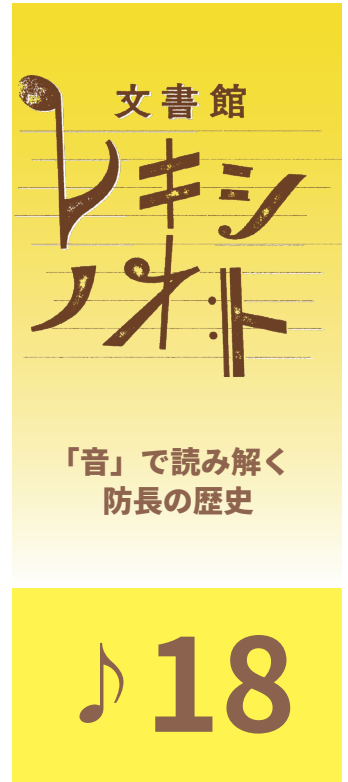




「大吞十郎兵衛許房書出」（県庁伝来旧藩記録 閥閥録 巻151）



戦いのノオト①

戦場（いくさば）の音と声

～軍勢を指揮する音、軍功を留め置く声～

【戦場の音】

戦国から江戸時代以前の戦場では、どのような音が響いていたのでしょうか。

攻城戦（籠城戦）・野戦・山岳戦など戦いの形は様々ですが、織田信長・豊臣秀吉による天下統一戦の前後からは、鉄炮を撃ちかけ、弓箭を射かけ、騎馬武者が疾走。また、足軽などの歩兵が、ある時は穂先を揃え、ある時は入り乱れ、刀槍を交えて戦う…そのような姿が今日では描かれ、またイメージされることが多いようです。

戦場では、弓・鉄炮、刀や槍、時には大砲（大筒）などの武具が発する音に加え、鎧・甲冑の触れあう音、旗幟が風になびく音、馬のいななき、さらには軍を指揮するために太鼓（シートNo.4参照）・法螺貝・鐘などの音が響いていたのです。

このよう集団を指揮するために音を利用することは、江戸時代にも引き継がれていきます。例えば参勤交代。この道中は藩主の駕籠を中心とした行列という「隊列」を組んで江戸と国元を往復します。その「隊列」（行列）を滞りなく進めるのに拍子木を使っていた。

【戦場の声】

次に戦場の声です。恐ろしい戦場でのことですので、怒号・罵声・悲鳴…、色々な場面で様々な人間の声がとどろいたことでしょう。比較的整然としたものとしては、「関の声」や「勝ち関」などがあるでしょうか。戦場で気持ちを奮い立たせ、勝利した際にはそれを確認する…戦場での声もまた多くありました。

武器としての声の役割もあります。「言葉合戦」とも言われます。例えば城や陣地などに籠もる敵に対して罵声を浴びせて挑発し、挑発に乗って出てきた敵を撃退するというものです。敵に対する悪口は、翻せば自軍の士気を鼓舞する効果もありました。

ところで、戦場での手柄も声が一役買っていました。上に示した写真は、肥前・肥後（現長崎県・熊本県）で発生した天草・島原の乱（1637-38）の時、一揆軍が籠城した原城（現長崎県南島原市）攻撃に関する資料（写）です。この戦いには九州の諸大名が一揆鎮圧の主力軍となりましたが、萩藩も参戦しています。

ここでとりあげているのは、この戦いに加わ



（右から）

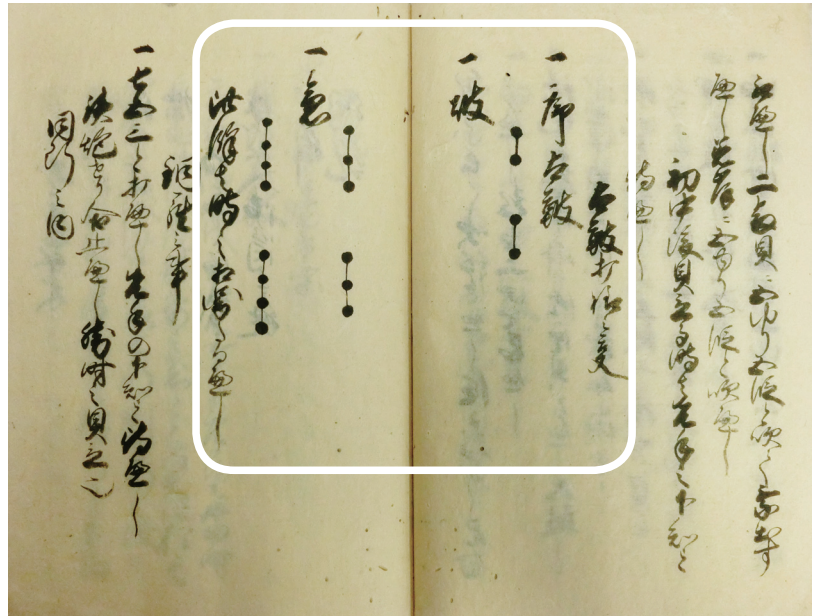
「関原陣」「大坂陣」「島原陣」
（毛利家文庫 14 軍記 21・22・25）

毛利家文庫 14 軍記には、御什書や閥閥録、譜録などから、戦いに関する記録を抽出してまとめたものがあります。

上に挙げたものは、関ヶ原の戦い、大坂の陣、天草・島原の乱に関するものです。大規模な動きの中で、毛利家の動向を概観したり、それぞれの戦いの手掛かりを得たりすることができます。

った大吞七兵衛（許忠）に宛てた、萩藩士志賀茂右衛門（元資）の書状です。内容は、原城総攻撃時（2月27～28日）の大吞七兵衛の戦場での働きを列記し、そのことを志賀茂右衛門が保証しているのです。しかもその「保証人」は志賀だけではなく、「細川越中守」（熊本藩主・細川忠利）の家臣である「神西与三右衛門」・「森本外記」・「松岡四郎兵衛」の3名も加わって、彼らと「言

をか八し、翌日書状取置申候」（言葉を交わして書状にしておくことにした（約束した））のでした。矢玉が飛び交い、敵味方入り乱れる戦場において、自らの武功を明らかにするために、他藩の人とも声を掛け合い、お互いの証拠を残す取り決めをしたのでした。



右は「相図考証」（毛利家文庫15文武30）から。この資料は、萩藩における相図の方法について集められたものです。相図には、貝（法螺貝）・鉦・太鼓・鐘・拍子木など音の出るものにとどまらず、狼煙や篝火のように視覚で捉えるものも含まれています。

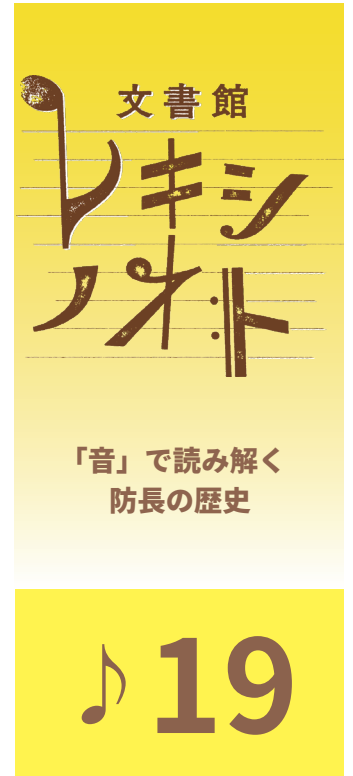
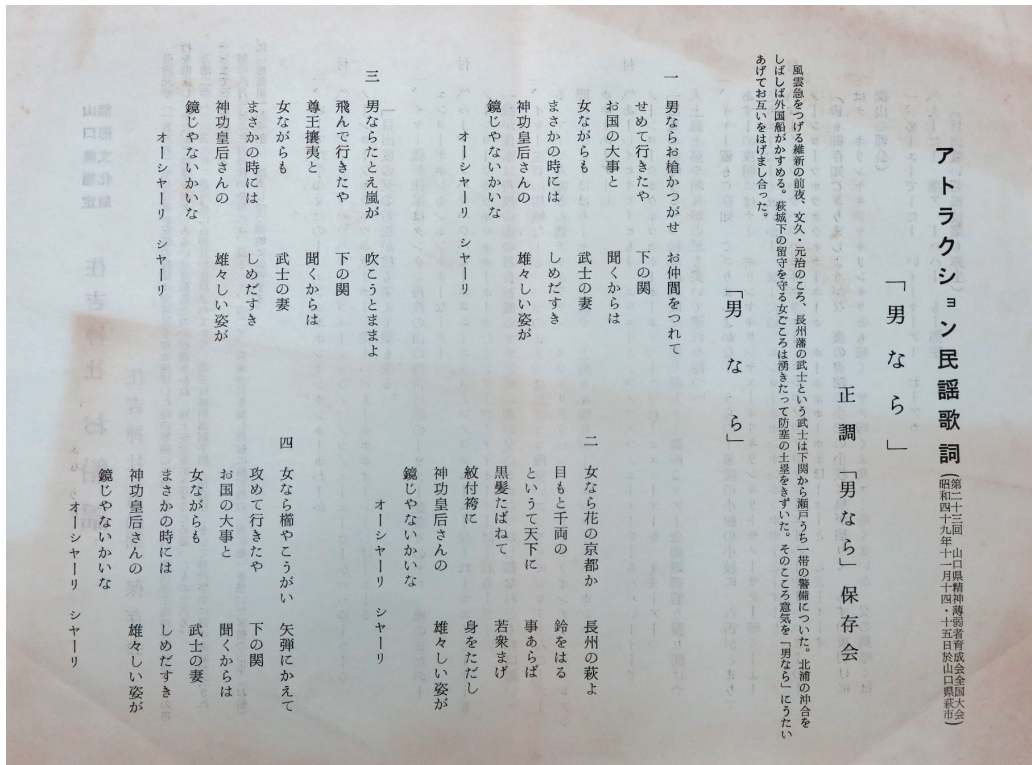
枠線で囲った冒頭には「太鼓打様之事」とあり、「序・破・急」の順で太鼓を打つ様を「●」で示しています。

今度至有馬、我等同心申、二月廿七日城
乗候日、松平伊豆守殿御軍法難背
指物并同、心之鉄炮を茂備之中二
残置、鑓本二而先手江罷出候刻、御方
御事、跡よりぬけかけ御出、御心懸之段
不浅候、其上前廿八日之朝、本丸江乗候時、
詰迄我等同前二一足茂おくれすのり
来り御かせき之通無比類候、慥二見届
申候、我等かせき之段、細川越中殿内
神西与三右衛門・森本外記・松岡四郎兵衛
言をか八し、翌日書状取置申候、
御存前二候、恐々謹言、
志賀茂右衛門
三月廿四日
大吞七兵衛様
元資 判
（許忠）

表面に示した「大吞十郎兵衛許房書出」（県庁伝来旧藩記録 閥閥録 巻151）。「大吞七兵（衛）」は、2月27日の原城総攻撃に際し、「抜け駆け」して攻城軍に加わり、翌日の本丸攻めの時も大いに軍功を挙げたようです（「御かせき之通無比類候」）。

これらの功績を志賀と、熊本藩士の神西・森本・松岡と確認し合っています。

ちなみにこの時の戦功は、「寛永拾五年三（ママ）月惣寄之節、茂右衛門同様乗込、首二級討取候」（毛利家文庫23譜録お85 大吞十郎兵衛許房）とのことでした。



「アトラクション民謡歌詞「男なら」・住吉神社「お船謡」」（佐々木均文書158）

戦いノオト②

幕末の歌(1) ～「男なら」～

【「男なら」と女台場】

幕末の長州藩では尊皇攘夷運動が高まり、文久3年（1863）には5月10日の「攘夷期限」をまえに藩士の多くが外国船攻撃のために下関に集結しました。5月10日から26日にかけて長州藩はアメリカ・フランス・オランダの船を砲撃しましたが、被害を蒙ったアメリカ・フランスはただちに報復攻撃を行い、長州側に大きな被害を与えました。

そうした状況下、城下萩でも外国船の攻撃に備える必要が生じ、菊ヶ浜沿いの海岸に台場（だいば）を築くことになり、あらゆる階層の庶民、留守を守っていた藩士・諸隊士らの妻や子供たちも競って工事に携わりました。

「男なら」は尊皇攘夷の熱に浮かされた長州で、台場の工事に携わったさまざまな人々によって歌われたとされ、萩周辺を代表する民謡となっています。

この「男なら」の歌詞をめぐるのは、いくつかのバリエーションと改変があります。そのことは、のちに「女台場（おなごだいば）」と呼ばれるようになるこの台場工事の喧噪と、その後の時代相を反映しているようです。

「男なら」の冒頭の歌詞は、おおむね

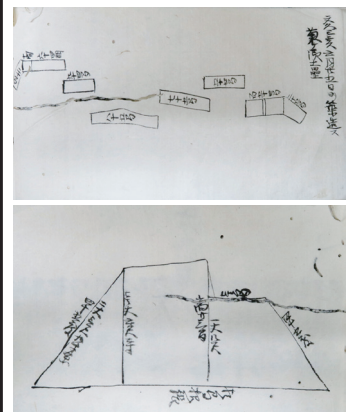
- (a) 「男なら お槍**かついで**お仲間（ちゅうげん）**となつて** ついて行たや下関」
- (b) 「男なら お槍**かつがせ**お仲間を**連れて** 攻めて行きたや下関」

の2系統があり、(a) が昭和11年にレコード化されて広まりましたが、昭和49年には上の写真のように(b)で歌われています（裏面の歌詞の傍線部分）。

(a) と (b) にはニュアンスの大きな違いがあります。この歌は「男なら（自分が男だったら）」という立場で歌われますから、士分でなく百姓身分である「お仲間」になりたい、という部分と、続いて歌われる「女ながらも武士の妻」とは矛盾します。この女性が武士の妻であれば、(b) の歌詞の方がしっくりくるようです。

(b) の歌詞は村田清風の孫にあたる村田峰次郎（安政4年＝1857生）が記憶していたもので、氏の『防長近世史談』（昭和2年刊）に記載され、『山口県の民謡』にも、明治42年（1909）生まれの福永キクエ伝承の歌詞として記録されています。

菊ヶ浜土塁



「萩城付近守衛一件」
（毛利家文庫 28 防寇 89）

上図の冒頭に「文久三亥六月廿五日ヨリ築造ス 菊ヶ浜土塁」とあります。上は海岸線における土塁の位置、下は土塁の構造（断面）図です。このうちの一つである「菊ヶ浜二之御台場二百分一平面図」が毛利家文庫 58 絵図 956 にあります。

（a）の歌詞は、あるいは百姓身分の人が、「せめてお仲間に」という気持ちで歌ったもので、それが後半部分と混在したのかもしれませんが。

さて、この歌の中ほどと後半部分も、時代とともに移り変わりました。中ほどの部分は、「尊皇攘夷と聞くからは」が戦後に「お国の大事と聞くからは」と変わり、後半の「三韓退治がかがみじゃないかいな」は、戦時中に「神功皇后さんの 雄々しい姿が 鏡じゃないかいな」となりました。

とくに後半部分の変更は、いわゆる「日鮮融和政策」の強化に伴って変更されたようで、時代相をよく示しています（田中助一『萩民謡 男なら』等を参照しました）。

ところで、冒頭に述べたような長州藩危急存亡の秋（とき）にあって、「男なら」の歌の舞台であったとされる台場の建設は、とても賑やかで、かつ華やかな、お祭りのような雰囲気の中で進められたようです。

藩は建設の士気を高めるために人々の服装を自由とし、歌舞音曲も勝手次第としたため、服装は華美となり、作業後の酒食や喧噪は深夜まで及びました。見物人も多く押し寄せたため、藩もたまらず、見物人や華美な服装、次の日に支障をきたすような騒ぎを禁止したほです（「御黒印御書付御張紙控」毛利家文庫40法令92）。

工事は順調に進み、半年ほどで完成しました。

＊昭和2年刊の村田峰次郎『防長近世史談』に載せるもの

男なら

お槍かつがせお仲間を連れて
攻めて行きたや下関
女ながらも武士の妻
まさかの時にはしめだすき
三韓退治が手本じゃさうな
おうしやりしやり

＊昭和11年にコロムビアレコードから発売された「男なら」の歌詞

男なら

お槍かつがせお仲間になつて
ついて行きたや下関
尊皇攘夷と聞くからは
女ながらも武士の妻
まさかの時にはしめだすき
神功皇后さんの
三韓退治がかがみじゃないかいな
おうしやりしやり

＊昭和30年に日本ビクターから発売された「男なら」の歌詞

男なら

お槍かつがせお仲間になつて
ついて行きたや下関
お国の大事と聞くからは
女ながらも武士の妻
まさかの時にはしめだすき
神功皇后さんの
雄々しい姿が鏡じゃないかいな
おうしやりしやり

大津絵（「てれん持」）

大津絵とは「大津絵節」のことで、江戸時代後期から明治時代にかけて全国的に大流行しました。三味線で伴奏する、娯楽的な短い歌謡で、宴席の座興や寄席で歌われました。左は、菊ヶ浜の台場建造の情景と喧噪を歌った大津絵「てれん持」です。当時は大人気の歌だったようです。

菊ヶ浜の御台場で、さても見事なてれん＊もち、
町々の加勢事、三味や太鼓ではやしたて、
ほんにお台場の事ならば、

翁（おう）さま婆さまも打連れて、

雨の降る日も風の日も、朝の六ツの勢ぞろい、

晩の七ツに引き揚げる、くたぶれ足でも厭わずに、

明日もとうから出掛けましょ、

八重萩の菊ヶ浜、さても見事なてれんもち、

数多のお女中は襦袢に小袖、黒の脚絆に白の紐、

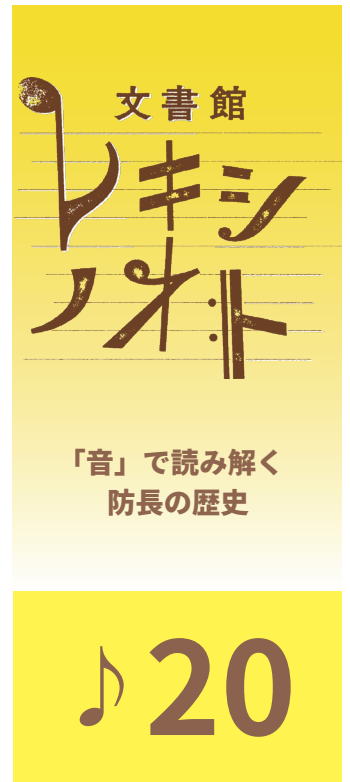
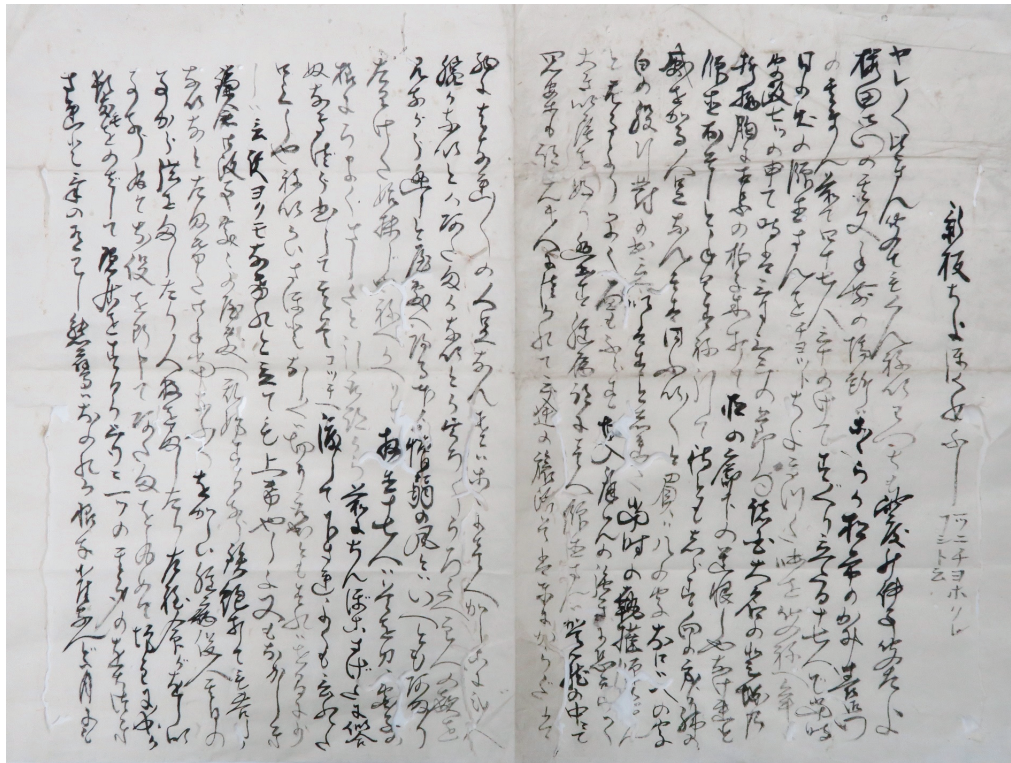
折り編笠でわらじ紐しめ土運ぶ、

数多の諸役人は土手の上、

太鼓に拍子木法螺貝吹き立てゝ……

＊てれん…土を運ぶ手箕（てみ）のような道具か。

この大津絵は、昭和10年11月6日の「防長新聞」に載っています。



「新版ちよぼくれ節」（鳥居家文書80）

戦いノオト③

幕末の歌(2) ～ちよぼくれ～

幕末期の多くの事件は、文字で書かれたもののほかに、調子のよい七・五調にのせて歌われ、また語られて人々のあいだに知られていきました。ここで紹介する「ちよぼくれ」もそのひとつです。

「ちよぼくれ」はもともとは「祭文読み」だったと思われますが、江戸時代後期には「クドキ（口説き。説経節や人形浄瑠璃・歌舞伎において情感たっぷりに聞かせる部分）」の影響を受け、タイムリーな話題を聴衆におもしろおかしく、興味をそそるように聴かせたものです。大坂では「ちよんがれ」、江戸では「ちよぼくれ」と呼ばれました。当館にのこる資料は、いずれも「ちよぼくれ」とし、「ヤレヤレ皆さん、聞いてもくんやれ」で始まります。

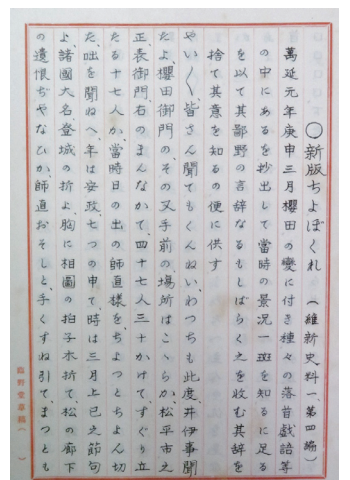
「ちよぼくれ」は、錫杖や鈴などを鳴らして拍子を取り、半分踊りながら早口で歌う大道芸・門付芸だったと思われますが、音源は残っておらず、その調子や踊りについては明らかではありません。

【新版ちよぼくれぶし】

上の写真は安政7年（1860）におきた桜田門外の変を題材にしたものです。いうまでもなく世上の大事件であり、安政の大獄で吉田松陰を失った長州藩にとってみれば、なおさら耳目を集めたことでしょう。江戸で作られ、歌われたものを書き取ったものと思われる。井伊直弼の乗った駕籠が襲われたときの一節。

…跡に一人師直さんは、駕籠の中にて思案も跡先（あとさき）、人につ（突）かれて三途の旅路、首は東にからだ（体）は西に、はなればなれの人足なんぞハ、ここに壱人、かしこに弐人、腕がないとか頭がないとか、うろうろうろたへ主人の敵（かたき）を、見ながら逃して屋敷へ帰る、本より情弱の風とハいへども、あまりたわけた始末じゃねへかへ、ソレ…

ここでは主人公の名をそのまま言わず、（井伊）直弼を「師直」と言い換えています。これは当時の歌舞伎などと同様で、もちろん、聞く方もそのことは十分にわかった上で聞いていました。



「新版ちよぼくれ」（小川五郎収集史料 213）

写真は「臨野堂草稿」（「臨野堂」は小川五郎の雅号）の罫紙に書かれたもので、冒頭にとりあげた「新版ちよぼくれぶし」のほか、「時事を評する長歌」、文久2年（1862）頃に大流行した「新聞（しんもん）チヨボクレ」等を納めてあります。

当館には、そのほか「菟山漫録」3（毛利家文庫 29 風説 52）に3種のちよぼくれが残されています。

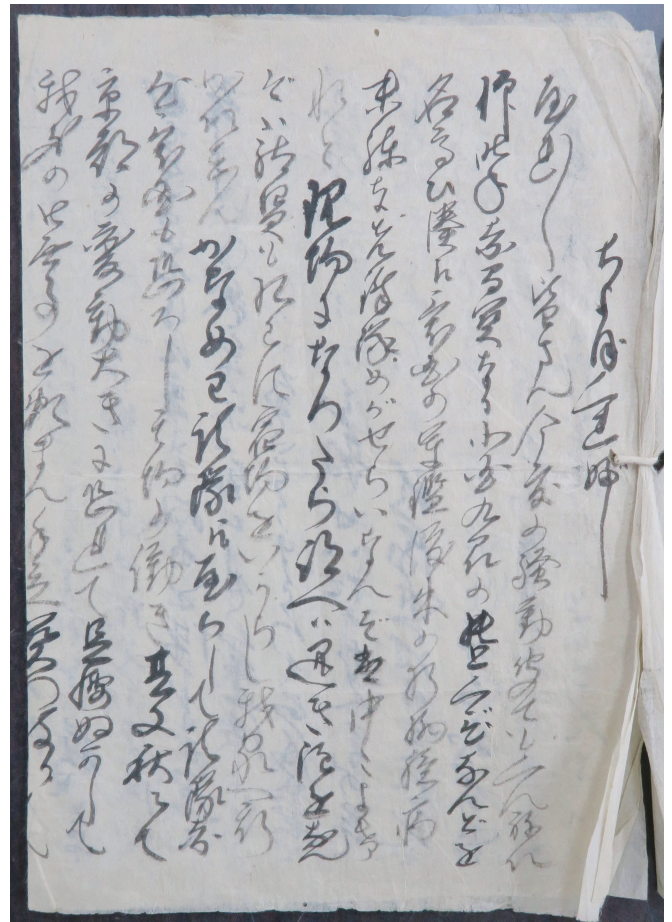
【大田絵堂戦のちょぼくれぶし】

ちょぼくれは大坂や江戸だけでなく、地方においても、そこで起きた事件を題材に作られ、歌われ（語られ）ました。まさに今日でいうニュースの一形態といえるでしょう。当館の塩田家文書・佐川家文書（大島町）にのこる、「大田・絵堂の戦い」を題材にしたちょぼくれを紹介します。

大田・絵堂の戦いは元治2年（1865）正月、美祢市美東町の大田・絵堂を主戦地として、萩藩政府の正規軍である先鋒隊（撰鋒隊）と、高杉晋作・伊藤博文・山県有朋ら諸隊との間で戦われた内戦です。1月6日の夜半に諸隊側の奇襲で始まった戦闘は、10日間の交戦で諸隊が勝利しました。

諸隊の勝利は藩の政治転換をもたらし、大村益次郎が登用されて軍政改革に着手、第二次幕長戦争（四境戦争）で長州側が勝利することで、時代は明治維新へと突き進むことになりました。

右の写真は萩藩士だった塩田家につたわったもので、同内容のものが佐川家文書（大島町）143にもあります。



「美祢郡大田絵堂戦ちょぼくれ節」（塩田家文書1029）
＊意味のとれない部分を佐川家文書（大島町）143で
対校した歌詞を〔イ〕として下に示します。

ちょぼくれぶし

やれやれ皆さん今度の騒動聞いてもくんない、

抑（そもそも）昨年赤間関なる北国九州の、のどくびなんぞを〔とイ〕

名高ひ湊江異国の軍艦渡来の折柄、臆病未練な

先（撰 鋒隊めが、せうい「攘夷イ」なんぞは中々よけれど、

現場になったら跡へハ（とイ）退き、注進なんぞハ（とイ）駄賃も払わず、

宿場をいからし（いらかしイ）我家へ斯（戻つてイ）、

〔御上の御無事を尋る有様、聞るゝ事かへ、イ〕

かい〔肝イ〕じんかなめわ諸隊江やらして、諸隊〔のイ〕赤心

異国も恐ろし〔るゝイ〕、其場の働き、其又秋二て〔からイ〕京都の変動、

大きに恐れて足腰ぬかして

我身の御無事を〔ハイ〕頼まん手立〔にイ〕、関門破りて

御屋形とき除け、上々様をバ萩江と弔ひ〔伴ひイ〕、

そりや又よけれど〔そイ〕東の親父や、尾張〔州イ〕の〔親父イ〕や、

てき〔敵イ〕の先手に立たる奴原（やつらイ）を、城下に連れ込ミ

苦しい年越気楽ニやらして、大金渡して

ヘイコリヤハイコリヤ、へだばりまわつて、

正義（義）に〔でイ〕堅メル諸隊の死をば〔諸隊ものをばイ〕分散せいだのなんのかのとて

あけくのわ〔はイ〕てには、諸隊追討の立札なんぞを

諸郡へ立たる〔わイ〕、まだまだよけれど、却而（かえって）我身の追打となるのを、

ちっともしらずに、のっけに一番

絵堂の夜討に、肝を潰して大きなこんざつ（混雑）、

やれ逃げそりやにげ、物も大小もなにもいらぬ、

そりや又よけれど、がたがたふる〔振イ〕ふて、

座板の下からこそそ出るやら、漬物桶から頭を出スやら、

手足もかなわず、大小もろ（貫）ふて、

ひゃこひゃこ（ひよこひよこイ）逃行き、夫もこ（懲）りずに、又々合戦

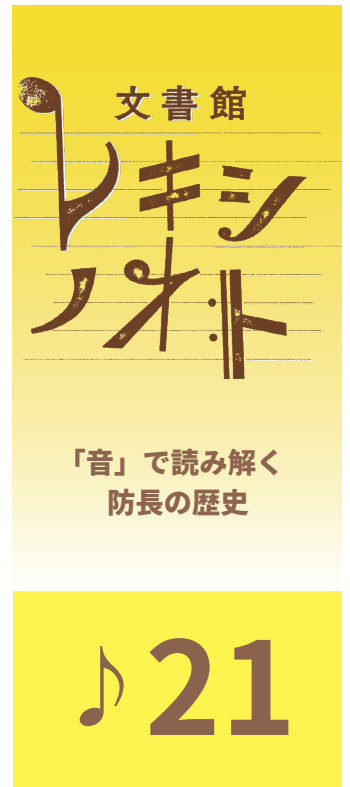
十二（と引イ）器械（大砲カ）も残らず取られて、黒米くろ（食）ふて

目計（ばか）りぎよる（きらい）つき、漸々（ようよう）又して〔今でイ〕ハ

合点がいったか、人を刺（頼んイ）で降参なんぞと聞ゆる事かへ

〔まだまだイ〕云ふ事（幾つもイ）あれども、こんなにたわけハ

相手にならない、ヘイサアホイヘイサアホイ



『山口県の民謡』と『阿東町の俚謡』（文書館図書）

戦いノオト④

幕末の歌(3) ～ヨイショコショ節～

ヨイショコショ節は、『日本民謡大観 中国篇』（日本放送協会、1969）によると、

七七五の詞型のあとに「ヨイショコショデヨサノサー」の囃し詞が入るところからこの名があり、山口県を中心として広く中国地方の各地で謡われている。これら一連の「ヨイショコショ」は、土地によって節廻しが少しずつ異なるところから、その名を冠せて「××ヨイショコショ」などと呼んでいるがいずれも大同小異である。曲の感じではさほど古いものとも思えず、幕末の流行歌が何かではないかと思われるが、源流を求める手掛りはまったくない。ともあれ中国地方での酒宴には必ずといっていいほど飛び出す唄である

とあり、『山口県の民謡』（山口県教委文化課、1983）の解説では、

熊毛郡上関町では奇兵隊にはいった者が持ち帰ったものだといわれ、大島郡橘町では文久年間（1861-63）からはやったものだといわれている。また一説には高杉晋作が作った奇兵隊行進曲といわれている

とあります。県内では祝い歌をはじめ、さまざまな歌詞で幅広く採集されていますが、幕末の時局や事件を生々しく題材にしたもの

が多くみられ、幕末の武士たちに人気の節だったことがうかがえます。

文久3年（1863）から翌年にかけては、下関での攘夷攻撃に始まり、8月18日の政変、四国艦隊による下関砲撃、禁門の変に続く幕府との四境戦争と、長州藩にとってはたいへんな事件が続きました。とくに四境戦争の勝利は酒宴の場での大話の話題を提供し、それらが次第にヨイショコショ節の形をとっていったものと考えられます。

それらについて、いくつか紹介します。

◆関はよいしょこしょうで 前田の沖で
うまく焼きます薩摩芋
アラヨイショコショデ イヤサノサ
薩摩芋 ハーコラコラ

＊この歌詞は、文久3年12月20日に勃発した、長州軍による薩摩商船長崎丸の砲撃・撃沈事件を歌ったものです。当時の薩長は、いわゆる「8月18日の政変」を受けて、強い緊張関係にありました。

◆長州殿様力が強い
三十六万石棒にふる
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
棒にふる

＊大義のためなら藩すら捨てる、という意味でしょうか。



『日本民謡大観 中国篇』
の「ヨイショコショ節」
（文書館図書）

NHK職員であった町田佳聲（かしょう、嘉章）が戦前から収集した膨大な民謡音源は現在もNHK資料室に保管され、書物として大部な『日本民謡大観』（1944-80）に結実しています。

柳田國男の指導を受けつつ、「歌が日本人のどういう場面で、どういう風に使われたか」にこだわった採集は、歴史資料としての一面を持っています。

◆三千世界のカラスを殺し
主（ぬし）と朝寝がしてみたい
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
してみたい
＊高杉晋作といわれる都々逸を取り入れています。

◆磨きあげたる剣の光
雪か氷か下関
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
下関

◆菊が開けば葵（あおい）が枯れる
長州沢瀉（おもだか）花が咲く
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
花が咲く
＊菊は皇室、葵は徳川、沢瀉は毛利の紋であり、それ
ぞれの消長をうたっています。

以上の歌詞は『山口県の民謡』から抜粋したものです。
音源は、山口県立山口図書館で聞くことができます。

ヨイショコショ節に限らず、俚謡は即興で随時作詞された
ものが、決まった節に乗せて次第に広まっていったものも多
く、地方色に富むものです。

下に紹介するのは、元治元年（1864）の四境戦争に
おいて、大村益次郎率いる長州軍が「石州口の戦い」
で幕府軍を破ったときの舞台となった近辺で採集されたヨイ
ショコショ節です。石州口の陣営や近辺で歌われ、阿武
郡地方に歌い継がれてきたものでしょう。大村益次郎の高
笑いが聞こえてくるようです。

これら石州口関係の歌詞は、伊藤武が昭和36年に「防
長民俗叢書」の一冊として刊行した『阿東町の俚謡』
に収載されているものです。当館の「明治38年童話伝説
俗謡取調書」（県庁戦前A教育67）にも同様の歌がいく
つか採訪されています。

◆関と小倉を櫓（たすき）にかけて
島（縞）にお（織）ります巖流島（縞）
アラヨイショコショデ エエエイヤサノサ
巖流島
＊武蔵と小次郎の決闘にかけて、小倉口の戦いを歌ったものでしょう。

◆長州攻めに来て我攻められて
猫の頬被りで後ずさり
アラヨイショコショデ エエエイヤサノサ
後ずさり
＊猫に頬被り（ほっかむり）すると、後ずさりして嫌がります。

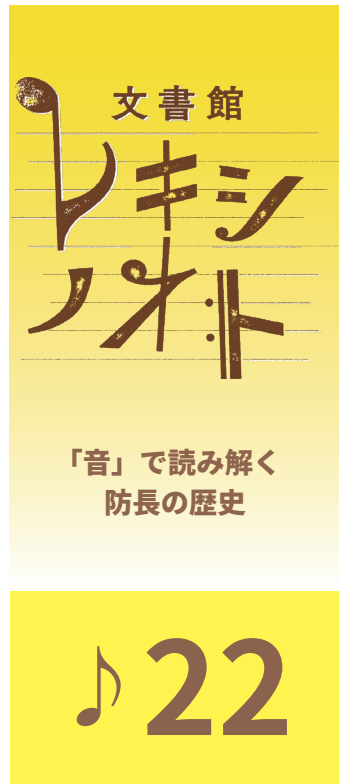
◆紀州行灯（あんどん）浜田で灯（とも）す
長州嵐が吹き消した
アラヨイショコショデ エエエイヤサノサ
吹き消した
＊「紀州の行灯」は幕府軍総督であった紀州藩重臣の安藤飛騨守のことをさします。

◆浜田殿様たえがとうはないか
長州攻めに来て攻められた
アラヨイショコショデ エエエイヤサノサ
攻められた
＊「たえがたい」は長州の方言で、恐縮することをいいます。浜田の殿様を揶揄しています。

◆浜田殿様にあげたいものは
白木三宝に九寸五分
アラヨイショコショデ エエエイヤサノサ
九寸五分
＊白木の三方（さんぼう）に9寸5分の短刀を乗せて運んでくるのは、切腹の時の作法です。

◆浜田殿様鯛（いわし）か雑魚（ざこ）か
鯛に追われて皆逃げた
アラヨイショコショデ エエエイヤサノサ
皆逃げた
＊鯛は長州藩の「隊」を意味します。この掛詞と比喻は当時の長州で人気があったようで、
よく使われました。（シートNo.20参照）

◆浜田殿様たえがとうはないか
六万石をも棒にふり
アラヨイショコショデ エエエイヤサノサ
棒にふり
＊こちらは、いうまでもなく幕府軍の主力であった浜田藩の敗北をうたっています。



「都風流トコトンヤレぶし」（軸物類80）

戦いノオト⑤

幕末の歌(4) ～トコトンヤレ節～

【都風流トコトンヤレぶし】

嘉永6年（1853）、浦賀に入港したペリー率いるアメリカの艦隊は、軍楽隊を同行していました。日本で最初に吹奏楽が鳴り響いたのはこのときで、ペリーらは隊列を組み、軍楽隊の演奏とともに浦賀奉行との会見場所まで行進しました。軍楽隊は、このあとも各地で演奏をしたようです。

幕府や各藩は西洋の軍制を取り入れる上で、「軍楽隊」も一緒に取り入れ、西洋の楽器も入ってきました。

慶応4年（1868）、戊辰戦争が始まると、長州などの倒幕軍（新政府軍）は「宮さん宮さんお馬の前にヒラヒラするのは何じやいな あれは朝敵征伐せよとの錦の御旗じや知らないか トコトンヤレ、トンヤレナ」で知られる「トコトンヤレ節（トンヤレ節）」を演奏しながら東上したといわれていますが、疑う向きもあります。いずれにしても、トコトンヤレ節は日本最初の「軍歌」であり、当時の大流行歌であったと言ってもいいでしょう。作曲は大村益次郎ともいわれるものの確証はありません。作詞は品川弥二郎です。

「トコトンヤレ、トンヤレナ」は拍子をとるための囃しことばでしたが、「トコトンヤレ」が「徹底的にやれ」の意味をもつようになったのは、この歌が人口に膾炙したからだという説もあります。

明治2年（1869）には、薩摩藩に日本初の近代的な軍楽隊である「サツマバンド」が生まれました。横浜でイギリス陸軍の指導を受け、主に新政府の公務で外国との式典の際に演奏したようです。

上写真の「都風流トコトンヤレぶし」は印刷物で、右端に日月の錦の御旗が見えます。岩倉具視は戊辰戦争に先立ち、薩摩の大久保利通と長州の品川弥二郎に錦旗の調製を委嘱していました。「トコトンヤレぶし」は別名「錦旗節」ともいいます。

「宮さま」は新政府の総裁で東征大総督でもあった有栖川宮熾仁（あすがわのみやたるひと）親王のことです。親王は和子内親王の婚約者でしたが、井伊直弼らの運動で婚約を辞退、和子は将軍徳川家茂に嫁ぎます（和宮降嫁）。この婚約解消は「悲恋の物語」として庶民の間に流布しました。

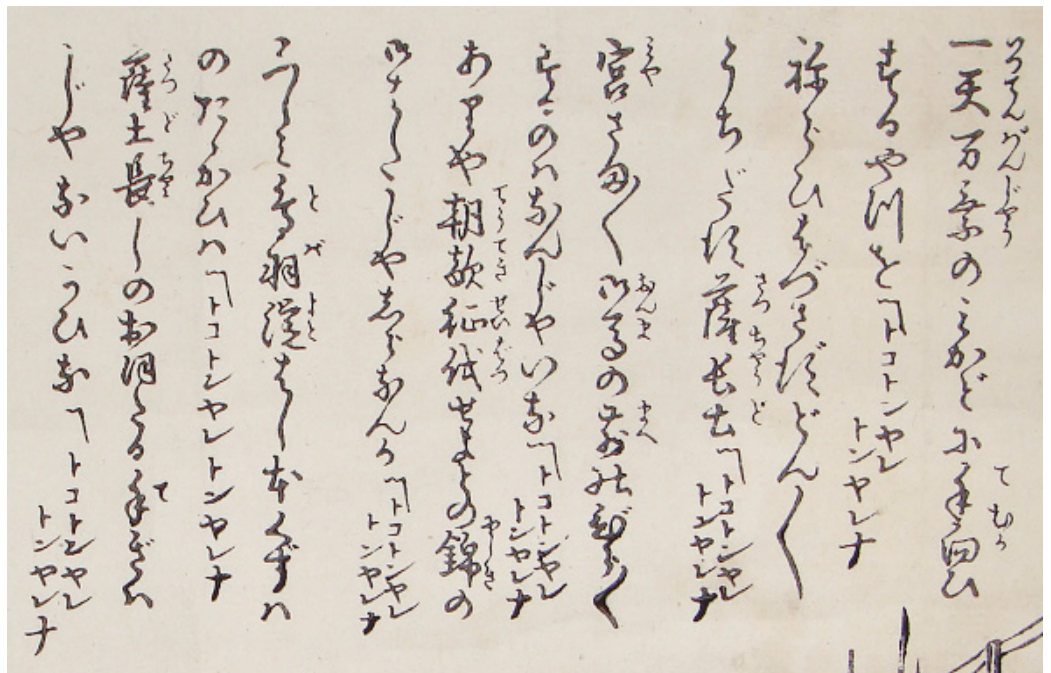


「尊攘堂遺墨集」
（尊攘堂史料 5）

尊攘堂は吉田松陰の遺志を継いで品川弥二郎が明治20年（1887）に京都に建てた施設です。幕末の尊王攘夷運動で倒れた志士を祀り、その肖像や遺墨等が保存されており、京都大学構内に現存します。

写真は当館の「尊攘堂史料」にある「尊攘堂遺墨集」にみえる有栖川宮熾仁親王の書および吉田松陰（右）と品川弥二郎の像。

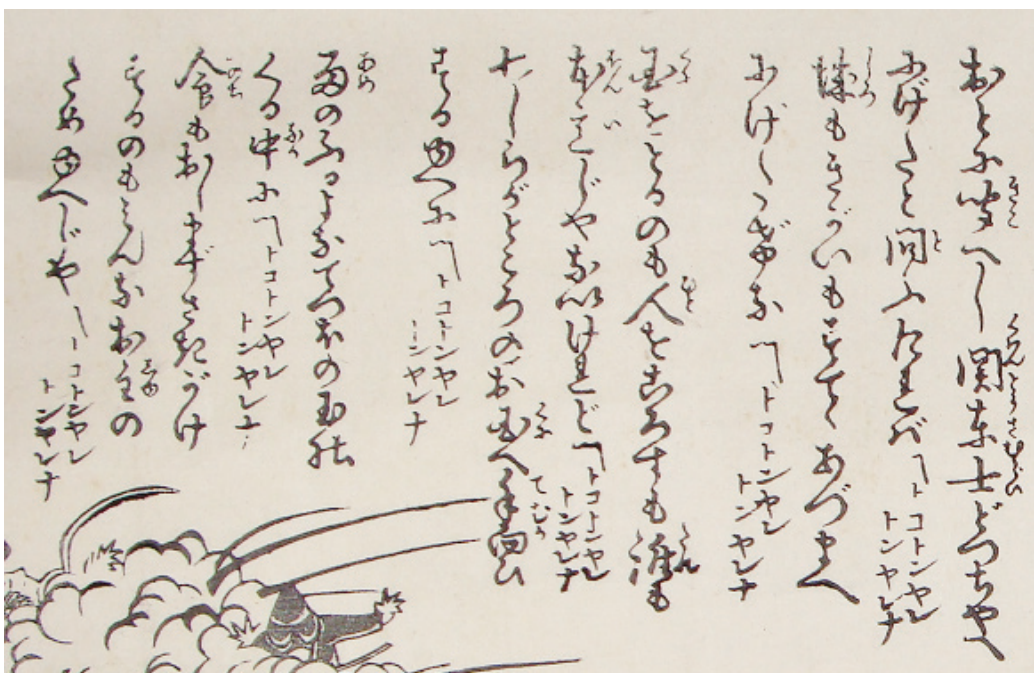
当館には他に、「品川弥二郎日記」（毛利家文庫 71 藩臣日記 36）もあります。



「都風流トコトンヤレぶし」（軸物類80）

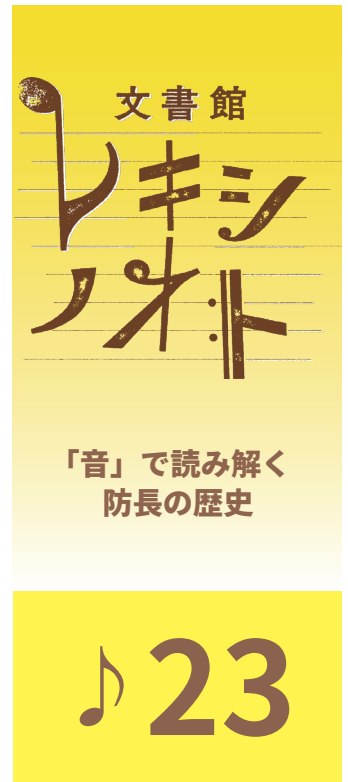
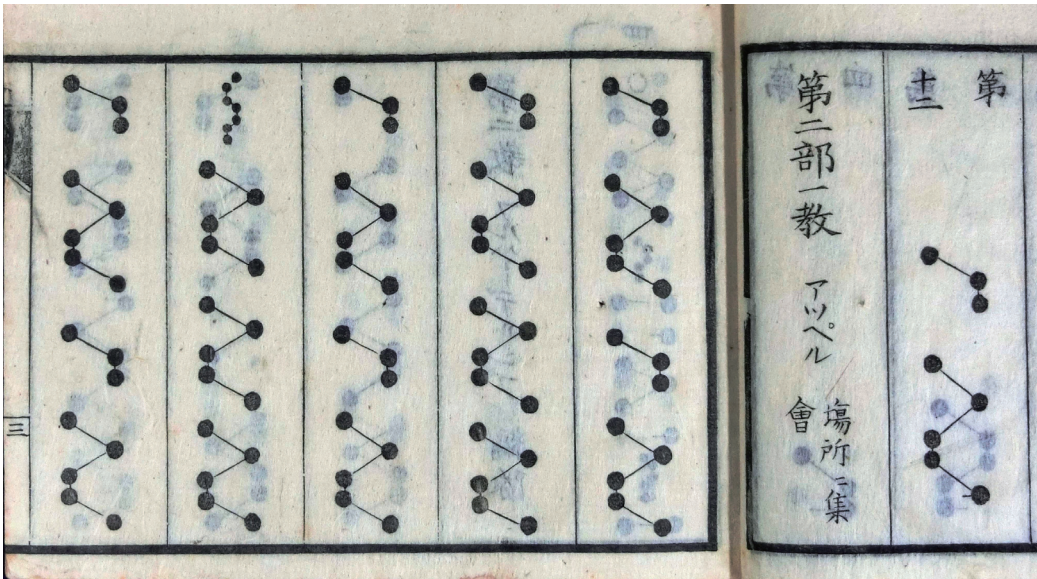
- ・一天万乗のミかど（帝）に手向ひするやつを トコトンヤレトンヤレナ
ねらいはつさずどんどんうちだす薩長士 へ（同）
- ・宮さま宮さま御馬の前のびらびらするのはなんじやいな へ（同）
ありや朝敵征伐せよとの錦の御はた（旗）じゃ知らんか へ（同）
- ・ふしミ（伏見）鳥羽淀はし本（橋本）くずハ（葛葉）のたゝかひハ へ（同）
薩長士（調子）のお（合）はたる手ぎハ（手際）じゃないかいな へ（同）

- ・音に聞へし関東士（さむらい）どっちゃへにげたと問ふたれば へ（同）
城もきがい（気概）もすてゝあづま（東）へにげたげな へ（同）
- ・国をとるのも人をころすも誰も本意じゃないけれど へ（同）
わしらがところのお国へ手向ひするゆへに へ（同）
- ・雨のふるよなてつほ（鉄砲）の玉のくる中に へ（同）
命もおしまさきかけ（先駆）するのみんなお主のためゆへじゃ へ（同）



トコトンヤレ節は、明治になってもさまざまな替え歌で歌われたようで、次のような日露戦争を歌ったものも残されています。

みなさんみなさん旅順の沖に すらりとならぶはなんじやいな
あれは「ろしあ」を征服せよとの御国の艦隊とは知らないか トコトンヤレトンヤレナ
皆さん皆さん向うに見ゆるはなんじやいな
あれは朝日の御旗をひるがえす二百三高地の占領と知らないか トコトンヤレトンヤレナ
「明治38年童話伝説俗謡取調書」（県庁戦前A教育67）



「改正鼓譜（長門練兵場蔵版）」（一般郷土資料1332）

戦いノオト⑥

銃陣鼓譜 ～西洋音楽との出会い～

【西洋銃陣の導入と西洋音楽】

基石を線でつなぎ合わせたような記号が書かれている上の写真は、慶応2年（1866）に長州藩で刊行された「長門練兵場蔵版改正鼓譜」という西洋太鼓（スネアドラム）の教練書です。

長州藩では、安政6年（1859）に西洋式の軍隊（西洋銃陣）への刷新を図り、これをオランダから学びました。西洋式の軍隊では、号令やドラムの信号音で一斉に動いたり、行進したりする集団行動が不可欠でした。そのため、西洋式の軍備と一体のものとして、それまで耳にすることのなかった新しい音—西洋音楽が入ってきました。

西洋銃陣においては、集団行動の信号音を発する鼓手（ドラマー）はとりわけ重要で、これを速やかに養成しなければなりません。オランダ人が使っていたドラムの楽譜は五線譜と音符で書かれていましたが、当時の人々は、このような楽譜になじみがありませんでした。そこで、和太鼓の鼓譜の表記法を参考にして、基石を線でつなぎ合わせたような記号を用い、左右の手の動きを図で示した独特な「鼓譜」が作られました。

見た目はとても西洋音楽の楽譜には見えませんが、スネアドラムを用いて演奏されるリズムは、従来の和太鼓によるものとは全く異なるものでした。

【鼓譜刊行の目的】

「改正鼓譜」の序文に刊行の目的が次のように記されています。

夫、鼙鼓（へいこ）ハ、進退動止ノ由ルトコロナレバ、兵事ニ与カル者知ラズンバアルベカラズ。近歳、西洋銃陣其ノ他長ズル所ヲ採り用ユベキコトナレバ、鼓法モ亦武技ノ一端、子弟タル者涉ラズンバアルベカラズ、鼓法ノ正不正、音韻ノ協不協ニテ三軍ノ勇怯勝敗ニモ拘ルコトナレバ、必ズ忽ニスベカラズ、因テ此ノ鼓譜ヲ上梓シテ童蒙瞻写ノ勞ト誤脱ノ弊ヲ省キ、兵制萬分ノ一ニ補アランコトヲ冀フナリ、
歳次丙寅十月誌

「鼓法も武技の一つである。鼓法の正確さが軍の士気さらには勝敗に関わるので、これを疎かにしてはならない。この鼓譜を刊行する目的は筆写の労と、筆写のミス無くすることにある」と、西洋銃陣における正確なドラム演奏の重要性が説かれています。



「神器陣諸相図定例並陣」
（毛利家文庫 15 文武 130）

長州藩では、西洋銃陣が取り入れられる以前、文化年間の軍制改革によって整えられた「神器陣」と呼ばれる陣形が採用されていました。そこでは、軍の指揮には、依然として従来の和太鼓、鉦、ほら貝が使われていました。

ドラムの信号音で組織的に動く西洋銃陣の導入は、和太鼓、鉦、ほら貝が鳴り響いていた戦場の音を一変させることになりました。

【西洋太鼓の打ち方の習得】

当時、どのようにして西洋太鼓の奏法が学ばれていたのでしょうか。明治35年（1902）に刊行された「幕末百話」に西洋太鼓を伝習した古老のつぎのような話が載せてあります。

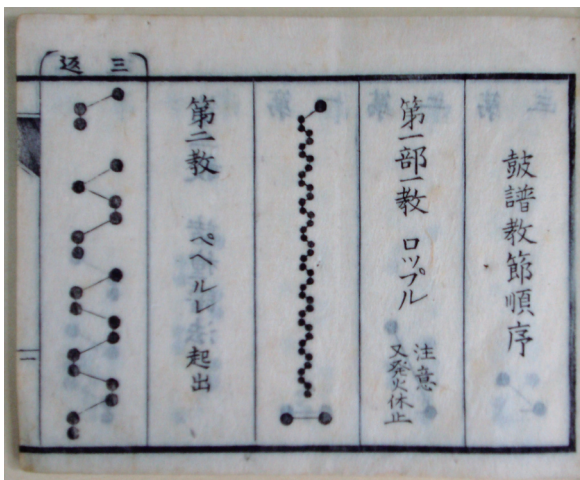
……まずイロハを申すと、ロップルとて2つ打ちを教える。次に5つ打ち、ホロロム。次に9つ打ち、ホロロンロン。次にエン、テイ。そしてだんだんと重複したものにする。

これによると、基礎的な打ち方から始まり、次第に複雑なリズムを習得していたようです。また、リズムの習得にあたっては「ホロロム」とか「ホロロンロン」などと口ずさむ、邦楽を学ぶ時の口唱歌が用いられていたようです。

鼓譜においても、様々な基礎的な打ち方を学んだ後、行進曲や「進め」「止まれ」「集合」「発火」など行動を指示するためのリズムを習得するように編集されています。

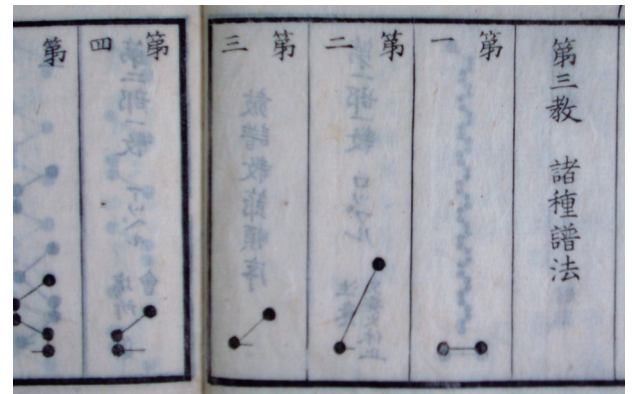
【ロップル】

左左右右左左…と2度ずつ繰り返し打つロール打ちのことで、初学者はまず、この打ち方を学びました、このロップルには「注意」や「発火休止」などの指示内容が添えられていました。



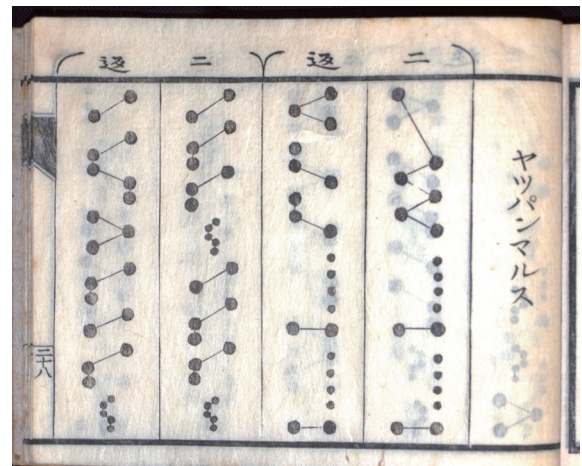
【諸種鼓法】

様々な基本となる打ち方が示されています。



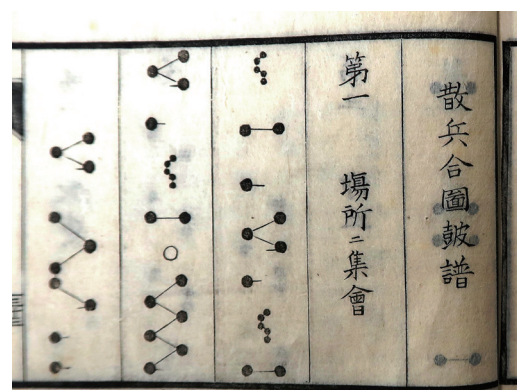
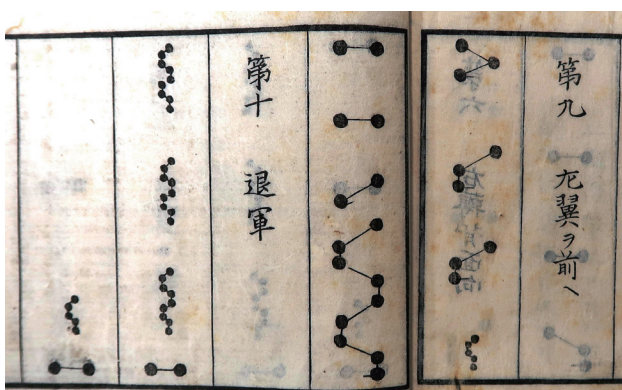
【5つの行進曲】

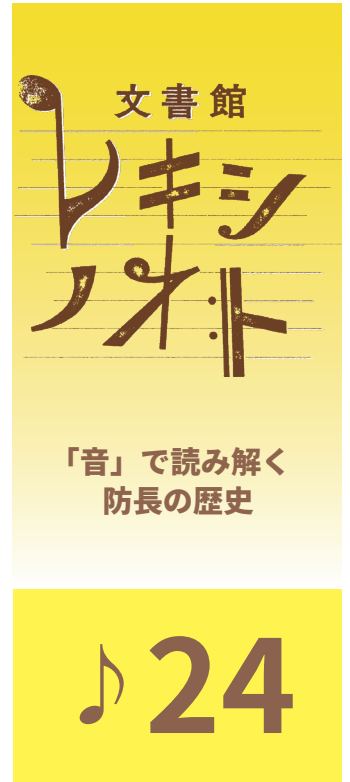
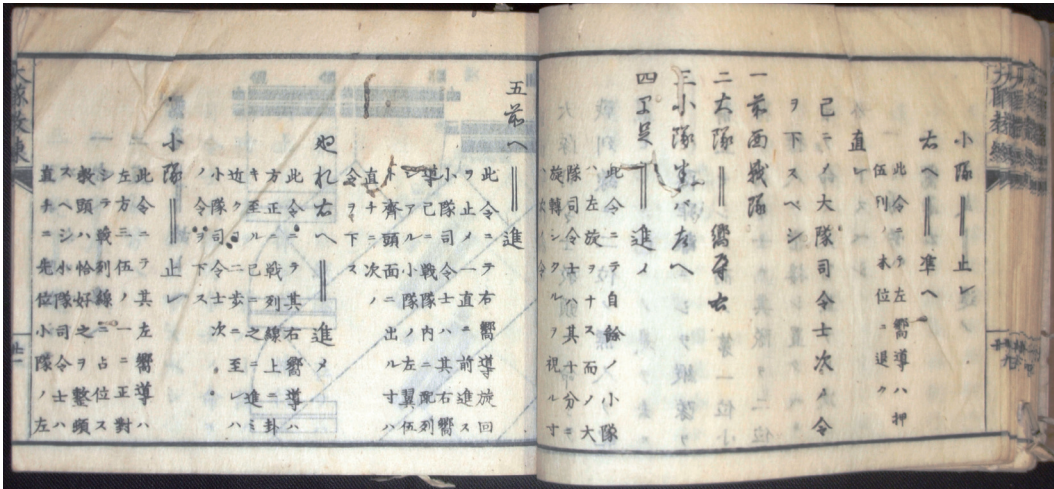
行進の時に用いる曲で、ヤッパンマルスやフランスマルスなど5つの行進曲が収録されています。写真はヤッパンマルスの部分です。「ヤッパン」は日本、「マルス」はマーチのことで、この「日本行進曲」が日本で最初に作られた西洋音楽と言われています。



【合図のための様々な鼓譜】

それぞれのドラムのリズムには、行動の指示内容が添えられていました。





「大隊教練書（長門練兵場蔵版）」（一般郷土史料1329）

戦いノオト⑦

身体に刻まれる音 ～号令・号音～

【号令のはじまり】

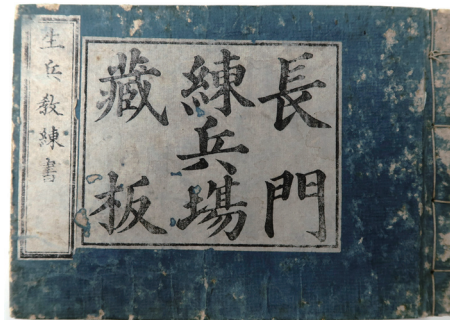
現在、私たちは、「まわれー、みぎ」「まえへー、ならえ」「まえへー、すすめ」「ぜんたーい、とまれ」などの号令を聞けば、自然と体が動くことでしょう。実はこれらの号令も、幕末の西洋銃陣の導入と軌を一にしています。

西洋銃陣では、号令または号音によって隊が組織的に動きました。兵士には、号令を正確に理解し、行動に移す能力が求められました。またドラムによる号音についても、リズムを聞き分け、その意味を正確に理解しなければなりません。

この能力を身に付けるためには、相当な訓練が必要で、そのため、銃陣教練が藩校明倫館はもとより、県内各地で実施されました。

当館および県立山口図書館には、長門練兵場蔵版の「生兵教練書（写真右の上：一般郷土史料1331）」、「小隊教練書」、「大隊教練書」、「散兵教練書」、「改正鼓譜」などの西洋銃陣の教練書が残されています。これらは教練指導のマニュアル書で、この内容に沿い、新兵に対し段階をおっ

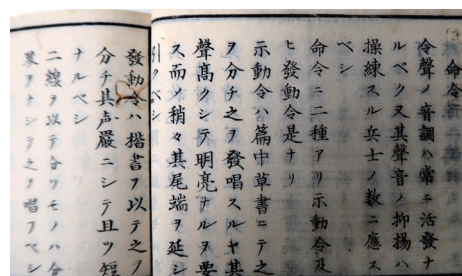
て訓練が施されました。以下、これらの教練書から訓練の様子を見てみましょう。



【号令で動く ～「示動令」と「発動令」～】

教練書では号令を「示動令」と「発動令」の2つに分けて説明しています。

「示動令は声高く明瞭にして、語尾を少し伸ばす。また発動令は厳かにして、短く」とあります。例えば、「まわれー、みぎ」では「まわれー」の部分が示動令、「みぎ」



銃陣太鼓の授業

慶応元年（1865）、萩藩は三田尻に小学舎を設け、庶民への教育を行いました。

そこでは、手習い・素読・算術に加え、太鼓のたたき方や歩行訓練も大事な授業のひとつでした。

一日の時間割は次のようになっていました。

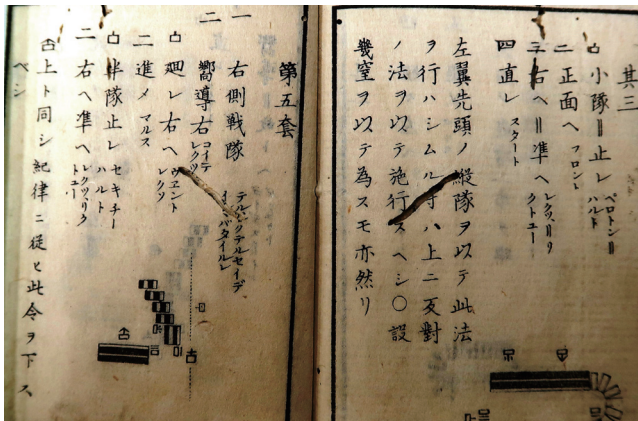
- 一、朝六つ時より五つ時まで素読
- 一、五つ時より九つ時まで手習
- 一、夕八つ時より七つ時まで算術
- 一、七つ時より七時半時まで太鼓歩法

藩をあげて太鼓奏者の育成に取り組んでいたことが見て取れます。

の部分が発動令です。示動令により行動の準備をし、発動令のタイミングで行動します。「まえへー、ならえ」も同様です。私たちの身体にも刻まれている号令の源流がここにあります。

【オランダ語から日本語による号令へ】

西洋銃陣の習得は、長崎海軍伝習所でオランダ式を学びました。その指導にはオランダ人教官がこれにあたったので、当然、隊の指示はオランダ語で行われました。次の資料は安政5年（1858）に刊行された「歩操袖珍 小隊略解」（志道家文書489）で、号令が日本語とオランダ語で書かれています。



例えば、「小隊＝止レ」は、オランダ語では「ヘロトン＝ハルト」（ヘロトンは「小隊」、ハルトは「止れ」）となっています。また「右へ＝準（なら）へ」は「レクツ＝リクトユー」、「進め」は「マルス」です。

この伝習に参加した前原一誠は友への手紙の中で、「号令は原語（オランダ語）で、一向に分かりも覚えられもしない」とこぼしています。聞いたこともないオランダ語による指示に伝習生たちは大いに戸惑ったことでしょう。

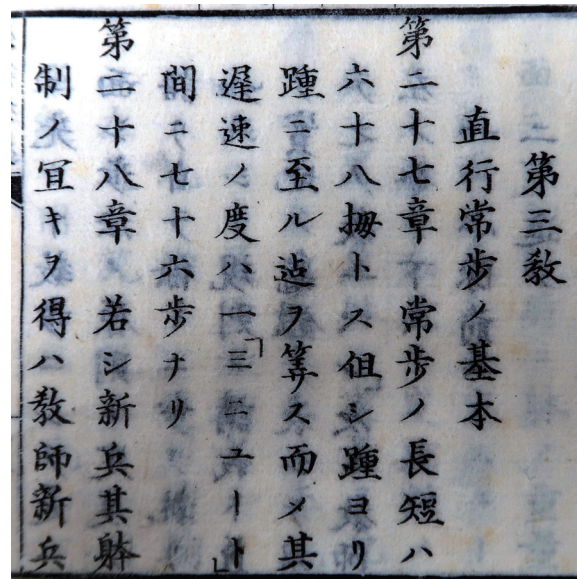
「長門練兵場蔵版生兵教練書」では、号令は日本語のみの記載となっていますので、この教練書の刊行の頃はオランダ語による号令から日本語による号令に切り替わっていたと考えられます。

【号音による指示】

シートNo.23で見たように、ドラムのリズムパターンで様々な指示が伝えられました。通常は号令とドラムによる号音が併用されたようですが、散兵戦術などの際、号令が届かない時はドラムの号音によって指示が出されました。また、全隊のうち、ある特定の隊のみに指示したい時には、第1連隊へは「第1マルス」行進曲、第2連隊へは「第2マルス」行進曲などと、隊を識別する曲が決まっていた、これを打って伝えられました。

【行進曲にあわせた歩行】

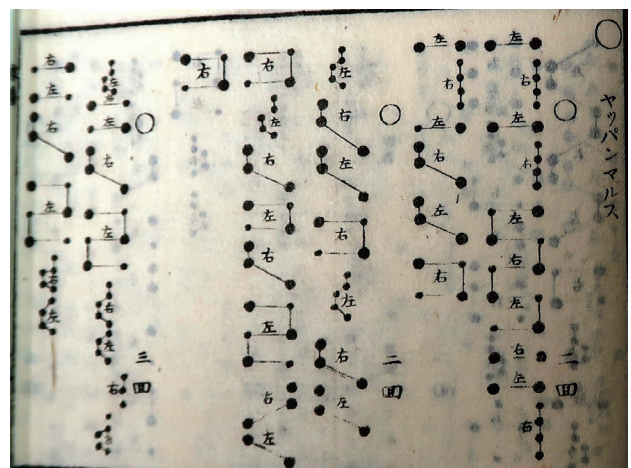
「生兵教練書」（一般郷土史料1331）では行進のテンポについて次のように定めています。

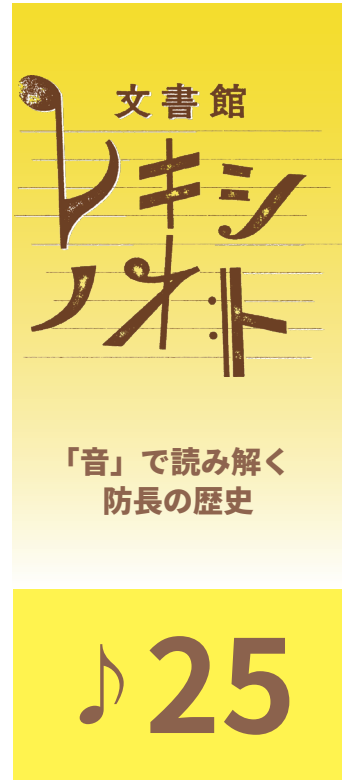
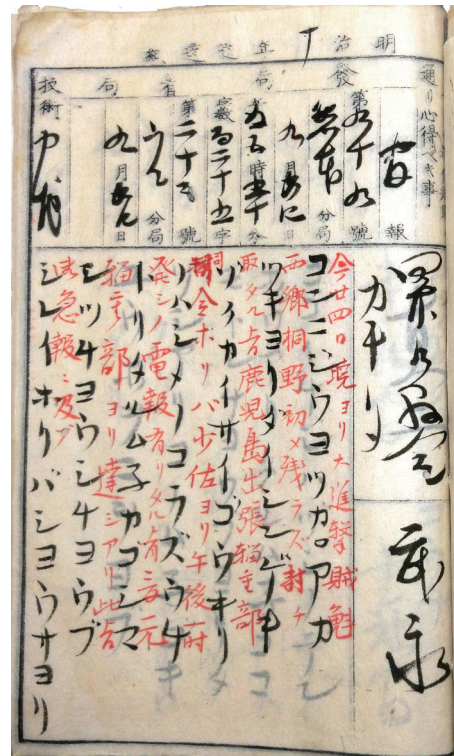
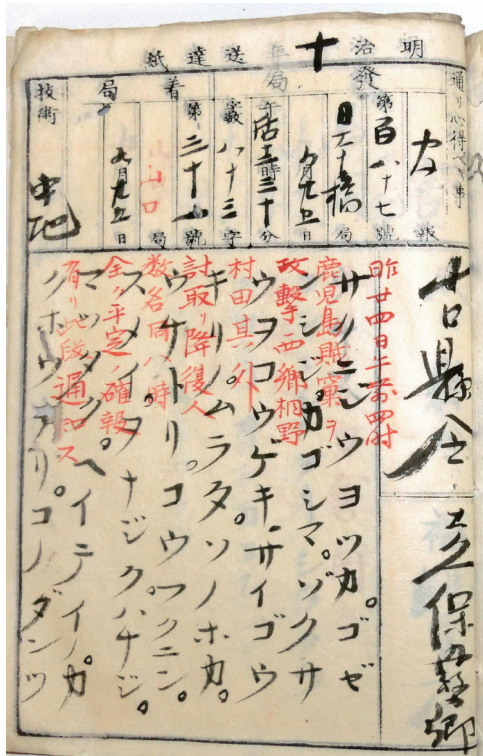


通常歩行は、1歩の間隔68cm、1分間に76歩とし、速足の場合は108歩と規定されていました。指導者はリズムをとるために、「一、二、一、二」と掛け声をすることも書かれています。

一定のテンポを保ち、集団で歩くことはそれまで日本にはありませんでしたが、伝習所のオランダ人教官の回想記によると、種々の研修や実習のうち、日本人はとりわけこの隊列による行進を好んだとのことでした。

下の史料は慶応元年に刊行された「歩操新式 下」（佐川家文書（大島町）1270）で、ヤッパンマルス（日本行進曲）の鼓譜です。ドラムを叩く、左右の手の動きとともに、「右、左、右、左、右、左…」の記述があり、これは行進の時の足の運びを表していると考えられます。ドラムによって演奏される行進曲のリズムは、集団で行進するのに適していました。





「熊本県暴動電報原書」（県庁戦前A総務380）

戦いノオト⑧

西南戦争と電報

【新しい音、電信】

明治2年（1869）12月、東京・横浜間で電信が開通し、電信事業が始まりました。その後、6年2月に東京長崎線、7年10月に東京青森線が開設され、10年2月までには北海道、本州、四国、九州の四島が電信で結ばれました。山口県では、東京長崎線開設後、10年12月、同線から分岐した線が萩まで通じました。電信路は全国に延び、24年末時点、離島を除きほぼ全国を網羅したといえます（逓信省伝務局『電信沿革略史』明治25年刊行）。

明治前期、電信という新しい「音」が全国に響き、情報がすばやく伝達されるようになったのです。

【西南戦争】

電信の幹線が北海道から長崎までつながったのと同時期、明治10年2月、新政府の政策に不満をもつ九州の士族たちが、西郷隆盛を擁して大規模な反政府戦争、いわゆる西南戦争を起こします。各地で起きた士族反乱としては最大、最後のものでした。

戦争は西郷軍による熊本鎮台（熊本城）への攻撃で始まりました。政府は徴兵令に基づく軍隊を派遣してこれに当たり、次第に西郷軍を追い詰めていきました。敗色が濃厚となり、各地を転戦した西郷軍は、9月に鹿児島に突入し城山にたてこもります。しかし、同24日、午前4時の号砲を合図に始まった政府軍の総攻撃により、午前9時までに西郷らが戦死し戦争は終わりました。

【西南戦争と電信】

西南戦争時、政府と関係各県は、電信を用いて情報をやり取りしました。かつてないスピードでの通信は、戦争に勝利する上で有利に働きました。当館には、西南戦争時、明治10年2～9月の間に、山口県庁と九州各地、あるいは東京との間などでやりとりされた電報文が数多く残されています（裏面一覧参照）。

どの電報文も、西南戦争期の生々しい状況を伝えるものです。そのいくつかを紹介しましょう。



山口県と西南戦争

山口県も西南戦争と無縁ではありませんでした。政府軍に物資を運ぶ人夫（輜重夫）が県内から数多く動員され、戦地へと派遣されました。

彼らの中には九州で病気になったり、命を落とした者もありました。また、巡査や壮兵の名目で募集され派遣された県内士族も数多くいました。

当館蔵「西南之役出兵名簿」「萩熊本暴動警備功労者履歴（県庁戦前A総務385・388）などによって彼らを知ることができます。

- ① 2月16日、京都滞在中の木戸孝允から山口県宛での電報・・・西郷挙兵の動きに伴い、木戸が山口県内、特に萩に不穏な動きが生じないかを非常に気にしていたことがわかるもの

「薩摩ハ是非大挙シテ討タネハナラヌ、又山口県又々ゴタ付キテハナラヌ、萩表ノ警察肝要ナリ、他県不平ノ徒必ス騒クヘシ驚ク事ナカレ、萩表ノ趣、屢々報知ヲ待ツ」

- ② 4月15日午前10時20分、久留米から山口県庁宛での電報・・・西郷軍が熊本城包囲を解いた14日のようすを伝えるもの

「昨十四日木留・植木休戦、熊本近辺激烈ノ砲声有リ」

- ③ 以下、戦争の終結を伝える電報

- 9月24日午後5時50分、武永（熊本駐在の県職員）より関口県令宛での電報

「今廿四日暁ヨリ大進撃、賊魁西郷・桐野初メ残ラ

ス討チ取タル旨、鹿児島出張輜重司令堀場少佐ヨリ午後一時発シノ電報有リタル旨爰元輜重部ヨリ達シアリ、此旨御急報ニ及フ」

- 同日午後6時30分、鹿児島県令より山口県宛で「本日官軍鹿児島城山へ攻撃、賊魁西郷隆盛・桐野利秋其他討取り、或ハ降復（ママ）致候、此段御通知ニ及ヒ候」

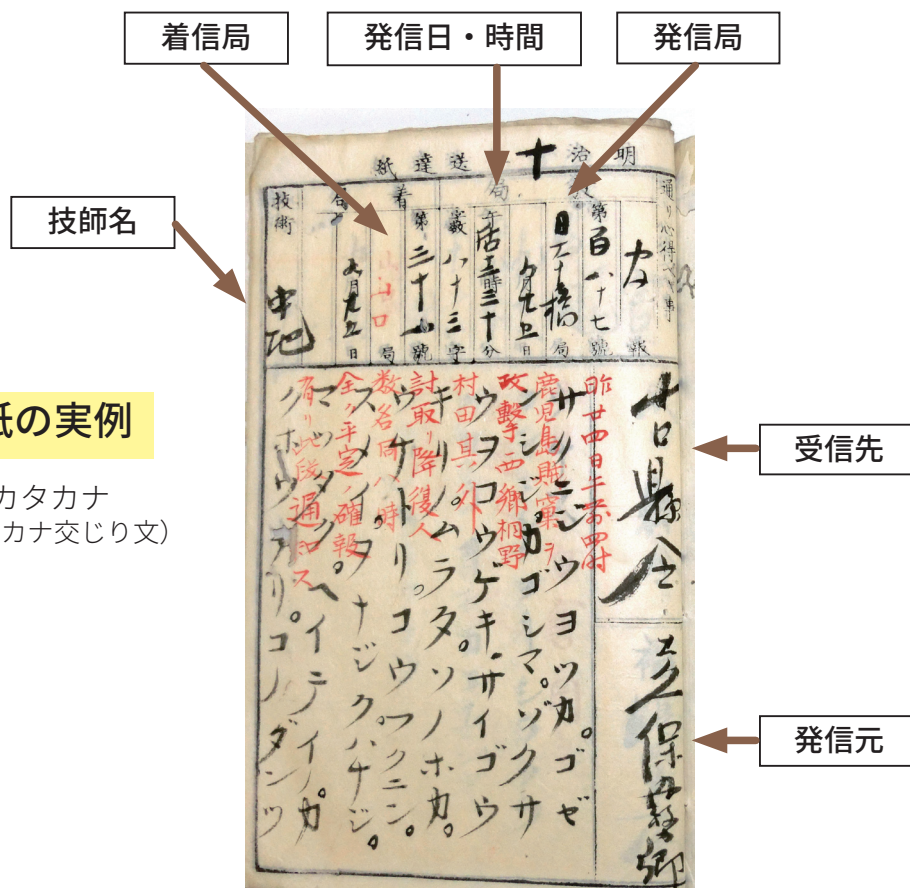
- 9月25日午後12時30分、内務卿大久保利通より山口県宛で

「昨廿四日午前四時、鹿児島賊窠ヲ攻撃、西郷・桐野・村田其外討取り降復人数名、同八時全ク平定ノ確報有リ、此段通知ス」

なお『電信沿革略史』は、西南戦争があらためて電信の重要性を認識させる結果となり（「国事上大ニ必要ノ度ヲ進メ」）、そののち「九州幹線ノ連環」（九州一環の電信路、11月竣工）と「四国線ノ新設」（高松～徳島間、12月）につながったと説明しています。

電報送達紙の実例

電報本文はカタカナ
（朱書は漢字・カタカナ交じり文）



当館が所蔵する西南戦争関係の電報一覧

請求番号	標題	内容年月日	内容
県庁戦前A 総務379	熊本県暴動電報郵便往復録	明治10年3月16日 ～7月11日	熊本県木葉に設置された山口県の出張所が発信・受理した電報・郵便を綴じ込んだもの。輜重夫動員に関するものが多い。
県庁戦前A 総務380	熊本県暴動電報原書	明治10年8～9月	山口県が発信・受理した電報を綴じ込んだ記録
県庁戦前A 総務381	熊本県暴動電報	明治10年2月	明治10年2月に山口県が発信・受理した電報を書き写したもの
県庁戦前A 総務382	熊本暴動往復録	明治10年3月	明治10年3月に山口県が発信・受理した電報を書き写したもの
県庁戦前A 総務383	熊本暴動往復録	明治10年4月	明治10年4月に山口県が発信・受理した電報を書き写したもの
県庁戦前A 総務384	熊本暴動往復録	明治10年8月～9月	明治10年8月1日～9月30日に山口県が発信・受理した電報を書き写したもの